

2020年6月15日

新島先生のホームステイ生活——あんなこと、こんなことから

——「隣人愛」を考える（7）：新島先生の受けた隣人愛（4）

副校長 竹山 幸男

6月が始まり2週間。先週から今週にかけても、京都ではやわらかな雨が降ったりして梅雨を感じつつも、毎日晴れたとても暑い日が続きました。朝夕はとてもさわやかな風が吹いてしのぎやすいのですが、日中は30度を超える初夏のような日が続いています。雲のない日には、天まで届きそうな青空の下で、学校の周りの山々やキャンパス内の木々の緑も生き生きと、いっそう濃く感じられる今日このごろです。ちょうど、今週のはじめ、晴れた日の夜空は、満月になっていて、京都タワーの白いライトアップとともに、京都の街並みを明るく照らしていました。6月に入って、少しずつ京都の街中の人や車の往来も多くなっていますが、まだまだ以前のような状況には戻っていません。6月の初旬、皆さんのお住まいの地域で見られる自然の佇まい、夜空の風景や街並みの様子はいかがでしょうか。



今週から来週（6月第2～3週）にかけても、学年をグループに分けて分散させたかたちでの登校日の設定をいたします。6月第1週目は、久しぶりにお会いできた生徒の皆さんも多くおられ、4月の半ばから約1か月半の間のオンラインでの学習を通じての皆さんとつながりをふまえながら、各教科の「学習のポータルサイト」での学びについて、サポートをする機会を持つことができました。6月初めの登校日に時にも、体調面、その他さまざまな事情で登校することができなかった生徒の皆さんがおられましたが、6月の第2週～3週目については、「学習ポータルサイト」を用いた学びを基本に据えて、各教科の学びの内容、生徒の皆さんとのやり取りを継続させていただきますので、これまでに引き続き、しっかりと取り組んでいただきますようお願いいたします。特に、今年の1年生の皆さんは、100年に一度というような感染症の状況がありますので、まだまだいろいろと学校の様子がわからないことも多いかと思います。生徒の皆さんからの質問、相談については、教科の内容であれば教科の先生へ、学校についての相談であれば担任の先生へご遠慮なくご連絡ください。先週もお伝えした通り、これまでの3か月間と直近1週間の日本の状況と対応、海外の状況と対応、そして、医療関係の専門家の方々の提言など、さまざまな状況を総合的に考慮すると、感染症の今後の状況については、まだまだ予測が難しい状況が続くものと思われます。同志社中学校では、中学生という発達段階での健康面への配慮や、京阪神はじめ近畿圏、ならびに愛知、岐阜などからも新幹線通学で通っておられる生徒の皆さんも多くおられことも考

慮しつつ、生徒のいのちと健康を守ることを最優先にしながら、学校としての対応を慎重に検討しております。感染状況の推移（緊急事態宣言解除による緩み、第2波への警戒など）にもよりますが、6月の第3週目あたりまでは、学年を分散させた登校日を継続していくことを考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第9・10週目（6月8日～19日）は、これまでの取り組みに引き続き、動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問を継続しますので、生徒の皆さんも参加してみてください。今週も、先週に引き続き学年を2つのグループに分けて、学年を分散した登校日を設定しますので、別途学校からの連絡を見ていただきますようよろしくお願いいたします。今週火曜日（6月9日）から6月下旬にかけては、各学年の聖書、保健体育、音楽、技術家庭、美術の先生方と生徒の皆さんとのzoomを用いての学び面談（クラスまたはグループなどで）が始まります。今週から来週にかけての各学年・クラスの学び面談の予定については、本日ご案内の面談予定表でご確認ください。

生徒の皆さんに夏休みに取り組んでいただく自由研究に向けたオリエンテーション、準備も少しずつ進められています。1年生の皆さんは、5月下旬の自由研究に向けてのグループ面談を行い、テーマについて参考になりそうな本について、「図書館の先生と相談して探してみたい」を選んだ生徒の皆さんには、図書館の先生から皆さんに連絡をさせていただいていると思います。さらに、参考になる本について質問がある場合には、図書館の先生にご連絡、ご相談ください。さらに、1年生は先週から今週初めにかけて、皆さんが取り組もうと考えている自由研究のテーマについての登録期間でした。まだ、登録をされていない方がありましたら、学習ポータルサイトの1年生の自由研究のコーナーから、各自登録をお願いいたします。あわせて、2回目の自由研究の面談を12日（金）から19日（金）まで実施していますので、ご参加よろしくお願いいたします。面談実施日までに、皆さんのロイロノートに送らせていただいている「自由研究2回目の面談に向けて——テーマを深めてみよう」について、動画を見ながら取り組んでいただきますようお願いいたします。2・3年生の皆さんの中で、自由研究の登録ができていない方がいらっしゃいましたら、至急登録をすませていただくようお願いいたします。2・3年生に皆さんに対しての登録方法、その他のオリエンテーションについては、教務部の自由研究担当の先生から動画にてすでに皆さんに案内しておりますのでご確認ください。登録をすませた今後の予定については、6月中旬に教務部の先生から連絡がありますので、しばらくお待ちください。

日ごろの担任の先生からの連絡、面談については、その都度レスポンス（応答）していただき、皆さんの日頃の様子などを知らせてください。健康観察については、引き続き保健室の先生あてご提出ください。特に、来週も登校日が継続しますので、健康観察をしっかりとしていただき、連絡をよろしくお願いいたします。第10週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第10週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第10週目のお知らせ」をご覧ください。機器（iPad）やアプリの使い方で不明な点があれば、「学習ポータルサイト」（→[生徒ページ]→[在宅学習サポート]）にアドバイスや解決方法を掲載し

ています。また、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページに、課題提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

新入生の皆さんにとっては、まだ1か月半が経過したところですので、皆さんの中で、教科の内容、学校のことなどでわからないことやご質問がある場合には、教科・担任の先生へ、また、機器の操作のことでわからないことがある場合は、ICT機器利用のヘルプデスクまでご遠慮なくご連絡ください。生徒、保護者の皆さんに対しての、学校の教育相談も随時受け付けていますので、校務センターまでご連絡くだされば、担当者から連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。

さて、先週の日曜日は教会の暦で「ペンテコステ」の日でした。その日にちなみ、新島先生の人生のターニングポイントとなったクリスチャンへの回心のできごとを、新島先生の愛唱聖句であった、ヨハネによる福音書3章16節から学んでみました。先週のお話の最後に参考資料として掲載した、函館の脱国を助けてくれた富士さんあての英文の手紙においても、クリスチャンとして新たな歩みを始めた新島先生が、その喜びを伝えるとともに「ぜひ聖書を学んでください。

(Study the Bible)」と念を押して伝えようとしている様子が伺えます。そのメッセージは、同志社で学び、集っている現代に生きる私たちにも、145年の時を超えて届けられているものと思います。さて、新島先生の英文の手紙は、「新島襄全集6巻」にまとめられていますが、今週はその中から、新島先生がフィリップス・アカデミーに通っておられた時に書かれた何通かの手紙より、いくつかのエピソードを紹介してみたいと思います。そこには、新島先生がアメリカの大学に学び、その後宣教師として日本に戻って来られ、同志社の創立も含めて活躍される予兆となるようなできごとが見られます。



ワイルド・ローバー号
(船主/A・ハーディー、船長/H・S・テラー)

1つめは、新島先生を上海からボストンまで乗船させて、アメリカに連れてきてもらい、船主のハーディーとの関係を最初につくってくれた大恩人、ワイルド・ローバー号のテラー船長との再会です。1866年10月、ちょうど新島先生がボストン港について1年がたったころ、新島先生のところに手紙が届き、テラー船長が再び中国に行くので、出校前にぜひ会いたい、とのことでした。しかし、新島先生は、アンドーバーからボストンに行く汽車賃がなくどうしようかと思っていたのですが、プリント夫人が切符を買ってきてくださり、ヒドゥンさんがボストンの街でのお小遣い（1ドル）を渡してくれました。高校での朝のお祈り会の後ボストンに向

かい、昼頃からボストン港で船長と再会し、その後夕食をとり、ボストンの街に出かけました。そこで、テーラー船長は、ボストンのとても寒い冬に備えてオーバーをくださったたり、帽子も買っていただきました。別れ際、駅で新島先生へ切符を買ってあげた後、船長は急に泣きはじめ、目から涙が止まらないほど泣かれました。きっと、最初に上海で新島先生と初めて出会ったこと、1年近いワイルド・ローバー号での洋上生活、ボストン港での別れの後、こうして、アメリカでの留學生活が始まり何よりも元気で勉學に励んでおられる新島先生の姿を見て、感極まったのではないかと思います。当時、密航者を乗せて来た場合、その責任を問われ、仕事を失う危険もあったわけですから、そのリスクと犠牲を越えた神様の導きと祝福にテーラー船長も思い巡らしていたのではないかと思います。「神様の摂理が、貧しい日本人である私の上に、これほどまでに働いたとは、なんと驚くべきことでしょうか。」と新島先生はその手紙に記し、新島先生もまたテーラー船長の涙に共感し、神様の摂理、不思議な導きに感謝していたのではないかと思います。



左) ベルリン号船長ウィリアム・T・セイボリー
右) ワイルド・ローバー号船長H・S・テイラー

脱国した函館から上海まで新島先生を乗船させてもらったベルリン号の船長セイボリーは、アメリカ帰国後そのことが船会社にわかり、その責任を問われ解雇されました。しかし、新島先生がボストンに到着した直後、セイボリーは新島先生を訪ね、自分が解雇されたことは一切触れずに、無事アメリカまで来られたことを喜ばれました。

その翌年（1867年）の7月、1年半通ったフィリップス・アカデミー修了後の休暇中に、チャタムにあったテーラー家を訪問することがありました。当時は、アンドーバーからボストンへ、ボストンで駅を移動して、そこからチャタムまで汽車で行く予定でした。チャタムに向かうには、途中の駅で乗り換えないとはいけなかったのですが、新島先生は、夕立の雨の音が強くて車掌さんの声が聞こえなかったのと、本に夢中になっていたことで、乗り過ごされたようです。気づいたときには、もう後の祭り。乗客の紳士に『乗り違いですね。今日中にチャタムには着けないよ。』と言われ、車掌さんに言って次の駅で下車。駅からフェリーボートで、全く知らない街、ニュー・ベッドフォードに夜に到着しました。困った新島先生はどうされたのでしょうか。

歩いていると教会が目に入り、通りがかりの人に教会名と牧師先生のお宅を教えてくださいました。そのお宅の家のベルを鳴らし、牧師先生と会うことになりました。『私は、よそから来たもので、ジョセフ・ニイシマと言います。行先違いで、見知らぬこの街に着きました。最小限の経費で一夜過ごせる場所を教えてくださいませんか。』不審に思った牧師先生は、宿代の半分のたしに、ということで、50セントを差し出したのですが、新島先生は、それを受け取らず『お願いですから、どうぞ安全な場所（safe place）を教えてください。』ともう一度お願いをしました。

新島先生の真剣なお願いを受けて、牧師先生は家を出て『「海員ホーム」（Seamans Home）に案

内しましょう』と言って歩き始めました。ちょうど、当時スペインから捕鯨で来ている人が多かったので、最初はそのあたりから来たのではと思われたようです。牧師先生は、新島先生に、歩きながら、いろいろな質問をされました。「どこから来たの」「いつごろに」「どこに住んでいるの」「アンドーバーで何をしているの」という問いに新島先生が答えると、牧師先生の知り合いが、新島先生の通っていた教会の役員で、すぐ近所にお住まいであること、学校のパーク先生のことをご存知であることもわかり、とても親しみをこめてさらに話してこられました。「アメリカの習慣はどうですか」「キリスト教をどう思っているの」「なぜわざわざアメリカに？」新島先生は、「日本からの密航、いかにして素晴らしい摂理に導かれてこのアメリカにやってきたか」について、短く話しました。このやり取りの後、牧師先生は、『先ほどと違ったところに案内しよう』ということで、その街で一番の美しく大きなホテル（Parker House）に案内して下さり、そのホテル代も全額目の前で払ってくださったのでした。『私があなたの国に行って一人の知人もいない状況になったときには、どうか親切にお願いしますよ。おやすみなさい。』と言って、ポケットに入れていた紙切れに名前（ウイロー・クレイグ先生）を書いてもらった後、教会に戻っていかれました。乗り間違えで、知らない街について、夜が来てどうしようか。これは、今もあり得ることでありますが、皆さんならどうされるでしょうか。今の時代から考えてみると、新島先生はこのころから行動力はあったようですね。新島先生は、このような出会いの中で、何とその日は、ホテルでおいしい夕食をとり、すばらしい部屋で過ごされたのです。そして、翌日、乗り換え駅まで無事に戻り、そこから汽車と馬車でテーラー家に着くことができ、温かい歓迎を受けたのです。チャタムでの新島先生は、2か月間ゆっくりと時間が流れ、テーラー家で家族の一員としてリラックスして過ごせました。毎日聖書と地理の本、ヘンリー・マーティン牧師の回想録を読んだり、ラテン



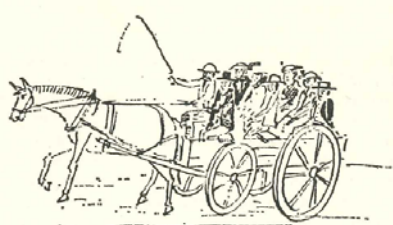
チャタムにあるテーラー船長の生家

語の勉強、演説の練習もされました。

日曜日には教会の礼拝にも出ながら、ゆっくりとした時間の流れの中で、浜辺での散歩やハマグリ採り、森での黒イチゴ摘みも楽しめたようです。

新島先生は手紙にこう書いておられます。「ニュー・ベッドフォードの街に着く前に、主が私を見守り、安全な場所に導いてくださるようにと祈りました。主はその祈りに応えて、あの夜、安全に過ごせるようにと、親切で敬虔な牧師先生のもとに私を導いてくださいました。自分自身の知恵を頼みとし、神様の摂理（Providence of God）を信じない人なら、多分、摂理

（Providence）のことは全く考えず、『あの時は運がよかったのだ』と言うでしょう。しかし、私は、確かに神様の摂理が私を安全な場所へと導いたのだと断言することができます。なぜな



Enjoying an outing with Captain Taylor's family, at Chatham, on Cape Cod, Massachusetts—Neesima on far right. (Letter 16)

チャタムでテーラーファミリーとともに馬車に乗っている様子を描いた新島先生のイラスト

ら、神様の摂理なしには何ひとつ起こるはずはない、と信じるからです。」新島先生は、脱国やハーディー夫妻との出会いという、とても考えられないようなとても大きなできごとから、このような誰もが経験しそうな身近なできごとまで、神様への祈りや見守りと導き、摂理を、留学生活を始められた時期に、実体験として持たれていた様子を知ることができます。（Providenceという言葉が何度も出てきます。）そして、このできごとの中にも、新島先生が神様への祈りを大切にされていたことがわかります。＜英文手紙challenge*1＞

「祈り」ということと言えば、この時期の手紙（1866年9月）の中に、特筆すべきできごとが書かれています。＜英文手紙challenge*2＞ それは、下宿先のヒドゥン家でのできごとです。ヒドゥン家では、ヒドゥンさんのおばさんも同居していたのですが、新島先生が下宿を始めて数か月後、春ごろから、高齢で体調がすぐれず、生死をさまよう状態になられることもありました。新島先生は、時々、彼女の部屋を訪ねて付き添いもされていました。ある日曜日の夕方、彼女が静かに何か考え事をされている様子を見て、新島先生はこう語りかけました。『私は、あなたに対する神様の祝福を祈っています。神様は私の祈りに応えてくださると信じています。あなたも神様に祈ってみませんか。きっと祝福してくださると思うのですが。』彼女は『ジョセフ。親切にありがとう。』と言いながら、涙を流して、大きな声で『主よ。私を憐れんでください。イエス・キリストを通してあなたのみ恵みを示してください。』と二度祈ったのです。1階にいたヒドゥンさんが大きな声を聞いてびっくりして、部屋まで来ました。そして、新島先生が『おばさんが祈られました』と言うと、ヒドゥンさんはびっくりしてこう言いました。『おばさんが祈ったって？今まで一度もおばさんの祈りを聞いたことがないし、気づかなかった。本当に嬉しい。』ヒドゥンさんは、おばさんに向かって尋ねました。『イエス様を信じますか。』『生きようと死のうと私はイエス様を信じます。』新島先生は、このできごとを手紙でこう書かれています。

「おばさんはおよそ70歳ですが、これまでイエス様について話したこともなく、お祈りをしたこともありませんでした。しかしあの日曜日の夕方に私が発したたった一つの問いがもとで、この世から罪を取り去り給う方のほうへ心に向けたのでした。・・・主が彼女のまじめな祈りを聞きとどけて、永遠の住まいへ導き給うことを信じています。」先週紹介した、ヨハネ3章16節で語られているような福音のメッセージが、新島先生の目の前で、新島先生の語りかけを通じて実体験として起こっていることに、あらためて新島先生の生涯を貫く「隣人愛」とその根底にある神様の愛とその救いの広さと大きさがあることを教えられるエピソードです。

最後に、ハーディー夫人に対して、フィリップス・アカデミーでの留學生活、ヒドゥン家でのホームステイ生活が始まってからの感謝をあらわす手紙（1866年10月）の内容と、イエス・キリストを信じる決心をして、洗礼を受ける報告をしている手紙の内容を見てみましょう。（全集10巻：65ページ以下、全集6巻：11ページ以下 参照）

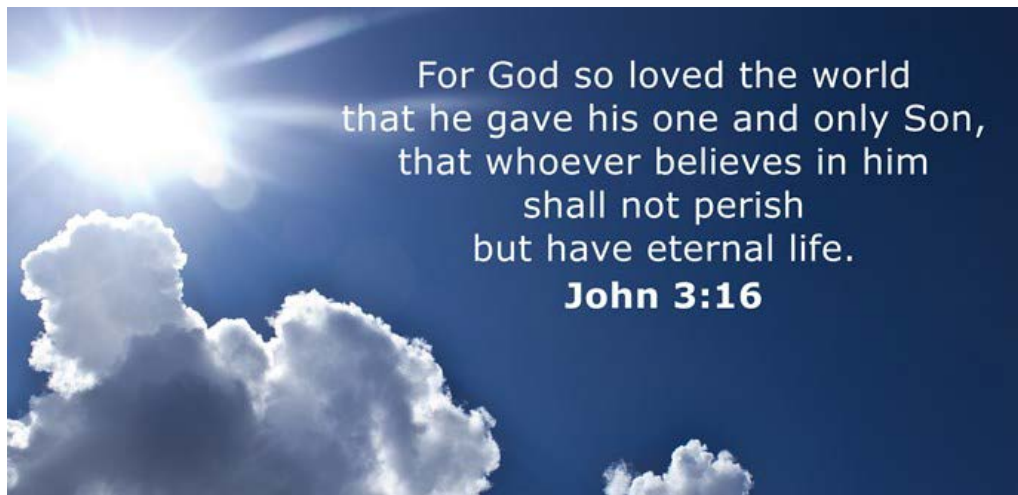
＊ そのようにして、奥様は（あのサマリア人のように）私をみじめな境遇から救い出し、よい教育を得させてくださいました。それゆえ、私は奥様をわが隣人と呼ばせて頂きます。それ

どころか、奥様を神が与え給うた母と呼ばせてください。私は日夜神に向かって、ご祝福がご家族の上に豊かにあるように祈っています。神は私たちの心の中にある願いをご存じです。信仰をもって神にお願いすれば、神は最上のものをもって答えてくださいます。小鳥のようにあわれな私を、よろしくお願いいたします。

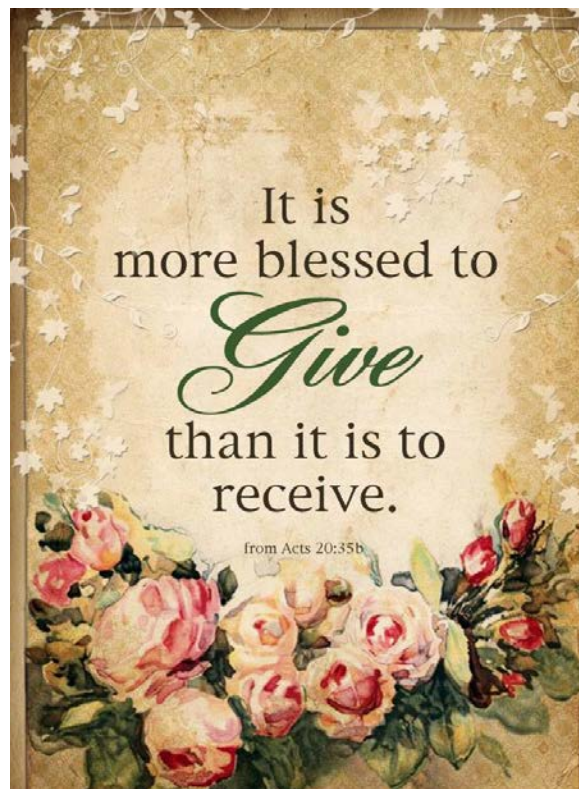
- * 私のトランクが届けられました。奥様、トランクを開けた時私は、奥様、トランクを開けたとき私は「奥様に対していったい自分はどうしたらいいのだろうか。」と考えました。ご自身のお子さんに与えるくらい多くのものを私にいただいたのですから。こういうものだけではなく、私が祖国のために大きな善をなすようにと、私は教育でもお世話になっています。これほどまでに私を助けてくださいますが、奥様は私から何の報いも期待されていないと思います。私が貧しいものであることはご存じの通りですから。それゆえ、私は、天において奥様の受けられる報いが必ず増し加わる、と申し上げてよいと思うのです。どうか主イエスの「受けるよりは与える方がさいわいである。」（使徒20章35節）という御言葉を覚えてください。
- * 奥様とハーディー様をご承認してくだされば、私は次の聖餐式のときに入会したいと思います。今や私はイエス・キリストが私たちの罪のために死に給うた神の御子であり、私たちは、イエスを通して救われる、と信じています。私は何にもましてイエスを愛しています。これが私の誓いです。私は日本に帰り、人々を悪魔からイエスへの方向転換させるために頑張ります。私はイエスに対して自分自身でしっかりと決断しましたので、今や何をもってしても私の愛をイエスから引き離すことはできません。けれども私の肉は霊よりも弱いので、それで私は教会に入会してキリストと一体になりたいのです。これは私がもっとキリストのようになり、キリストの御名のために私の国に大きな善をなしうるためであります。
- * 美しいクリスマスの朝です。すがすがしい幸福感に満たされています。ご存じの通り、ボストンに上陸してから今日まで、天の御父が私をこの上ないほど御護りくださったことを感謝しております。・・・神学校附属教会の聖餐式は、次の日の日曜日に守られることになりました。私はその時に入会し、父と子と聖霊の御名において洗礼を受けることになります。「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるので、恐れてはならない、おののいてはならない。（ヨシュア記1章9-10節）」新島先生の大切な聖句として心に刻まれています。

6月も半ばを迎えたこの1週間も、キリスト教学校に学ぶ私たち一人ひとりが、新島先生と同じように、これまで私たちを導いてくださった神様の愛への感謝の思いを祈ってみてください。そして、新島先生が日々の留学生活の中で、実際に体験した「祈り」への応答、身近な生活の中で出会った人たちから受けた「隣人愛」を思い起こし、主イエスの愛を受けた私たちが、周りの友達、身近な人たちへ「隣人愛」を実践することができるよう、神様に祈りつつ歩ませていただきますように。

「神はそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。ひとり子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである。」（ヨハネによる福音書3章16節）



「受けるより与えるほうが幸いである。」（使徒言行録20章35節）



August 8, 1867

I left Andover on the 25th July to visit my friends who live in North Chatham. When I came to Boston I met showers many times, but I carried my trunk from the Maine depot to the Old Colony depot in the interval of many showers. . . . I took my seat unfortunately in the back part of the car, not knowing future occurrences. When we came to Tremont the conductor called out the changing

of the cars, but I was reading a book in which I was much interested, and the same time a pretty heavy shower passed us, so that I could not hear his calling. When I thought that I had come to an halfway place where I changed cars when I came to Chatham the last time, not knowing the cars changed some time ago I asked a gentleman how far is the place where I may change cars to go to Chatham. He said, "Chatham!" much surprised, and told me "you have the wrong train now. You cannot go to Chatham to-night because this will go to New Bedford." I told the conductor about it and showed him my ticket to Chatham. He was a very good and kind man. He said: "You cannot help it now, and you must go to the next station, New Bedford;" and he said also he would not charge me at all. I came to Fair Haven about 7 o'clock P.M. Between it and New Bedford there lies a large river. I crossed it by a ferryboat and arrived at the city of New Bedford safely.

I knew not anybody there at all, therefore I thought it would be a safe way to find the right kind of people. When I found a church I asked a gentleman about its denomination and its minister's name. He answered me very kindly: "It is an Orthodox church, and the minister's name is Mr. C[raig]." I asked him about his residence. He showed me his house very plainly. When I went to his house and rang the bell, a young lady came to the door. I asked her to see Rev. Mr. C[raig] a moment. She took me to the beautiful parlor and gave me a chair, saying she would call out Mr. C[raig] pretty soon, and she asked me my name. I told her my name very plainly, but she could not get hold of my last name hardly, and went away understanding only that my name is Joseph. After a while Mr. C[raig] came to the parlor and shook my hand. Then I told him: "I am a stranger. My name is Joseph Neesima. I left Boston this afternoon at four o'clock to go to Chatham, but I took the wrong train, not knowing the cars changed at the station of Tremont, and I arrived in this city unexpectedly. Be so kind as to direct me to a house where I may pass the night with the least expense." He asked me: "Have you money enough to pay for your lodging?" I answered him: "Yes, Sir, I have, but I hope to pass the night with the least expense, because I did not expect at all to come to this city to-night." He thought I was a poor traveler and gave half of a dollar saying: "This may help you to a half of your lodging." I did not take it from him, saying: "No, thank you, Sir, I do not wish

to take this from you, but I hope you will direct me to a safe place."

It was quite dark inside of his house, because it was a cloudy evening and it was after seven o'clock. He took me out of his house and told me he would take me to a Seaman's Home, because he thought I was a poor Spanish fishman, seeing my dark complexion and knowing that many Spanish people are coming in the city for the whale business. When I was in his house I could not distinguish his appearance hardly, but I saw him very well out of the door. He is about fifty-six or seven years of age, and his stature is about middle size. He has dark hairs, and some of them are turned to gray. His manner is very simple, yet his appearance is very graceful. He did not talk much, but spoke very distinctly and eloquently. He asked me where I came from. I answered: "I came from Japan." "How long ago?" "About two years ago." "Where do you reside?" "I reside in Andover." Then he said he knew some people there. I asked him whom he knew there, and he said he knew Deacon A[bbott]. I told him I knew him and I resided a very short distance from his house. He said he knew Prof. E[dwards] A. Park and told me Prof. Park came to the city a few weeks ago to ordain some minister. He asked me what I did there. I answered: "I am a member of Phillips

新島先生が書いた

英文手紙に

チャレンジしよう！

＜英文手紙 challenge＊１＞

チャタムのテラー家で
過ごしているときに、
ハーディー夫人に宛てて
書いた手紙です。

生徒の皆さんも

読んでみましょう！

Academy.” He asked me how I liked American customs. I—
 “I like them better than our heathenish customs.” He asked how
 I like the religion. “I like the true God better than gods of wood
 and stone.” He asked how I came over to this country. I gave him
 a short account of my leaving Japan and how Providence guided me
 wonderfully to this enlightened country. Then he said he would
 take me to a different place from that which he mentioned before.
 He came with me to a large and beautiful Hotel called *Parker House*,
 which I supposed the best hotel of the city, and he paid also for my
 lodging. When I saw him take out money from his pocketbook,
 I took my money quickly and paid back to him. But he would not
 take it from me, saying: “When I go to your country and am
 a stranger, then please show me your kindness,” and went away
 quickly, bidding me good-night. He wrote his name on a paper which
 I found in my pocket—Rev. Wheelock Craig. I took a nice supper
 there and slept in a splendid room. . . . The next morning I took
 breakfast early. I came back to the same place where I missed the
 cars to the Cape, and arrived in Chatham little after 3 o’clock P.M.,
 taking a coach seven miles from the centre of Harwich. I was

received cordially by my old acquaintances here, and I was very
 glad to see them. Before I arrived at the city of New Bedford
 I prayed to the Lord that he would take care of me and guide me to
 a safe place. So he answered my prayers and guided me to such a
 kind and godly man to help to pass that night safely. Perhaps some
 people, who trust in their own wisdom and do not believe in the
 providence of God, would say that I was lucky at that time, not
 thinking of his providence at all. But I can say surely the Providence
 guided me to a safe place, because I believe nothing can occur without
 the Providence of God.

9 To Susan H. Hardy [L&L]

Andover

September 10, 1866

. . . Mrs. [sic] Hidden’s aunt, called Mrs. C[handler]¹, commenced
 to be weak from the last spring and grew worse and worse. Now she
 is in the point between life and death. In the evening of the last
 Sunday I went in her chamber and waited on her a little while.
 Though her mind turned aside, she seemed to me more quiet than
 any rest time. I told her: “Mrs. C[handler], I pray to God for your
 blessing and I believe He will answer my prayer. Won’t you pray
 to Him? I think He will hear your prayer and bless you.” Then
 she answered: “Joseph, I thank you for your kindness,” bursting in
 tears; and she cried out quite loud, “O Lord, have compassion on
 me, and show me thy mercy through Jesus Christ.” She cried
 twice in this manner. At that time Mrs. Hidden was downstairs.
 She heard then this crying, and thought very strangely, and came
 up to her chamber door and asked me: “What matter is it?” I told
 her she made prayer. She said: “Does she make prayer? I never
 heard her make prayer, nor noticed it in my life. I am very glad
 about it.” Then she asked her: “Do you trust in Jesus?” She said:
 “Yes, live or die, I trust in Him.” She is aged about three score and
 ten, but never said anything regard Jesus, nor made prayer; but from
 my single question in that Sabbath evening she turned her heart unto
 Him who takes sins away from the world. . . . I believe the Lord will
 hear her earnest prayer and guide her into everlasting habitation. . . .

1. Actually Miss Abigail Chandler.

新島先生が書いた

英文手紙に

チャレンジしよう！

＜英文手紙 challenge*2＞

ヒドゥン家で

過ごしているときに、

ハーディー夫人に宛てて

書いた手紙です。

生徒の皆さんも

読んでみましょう！